



Title	第14回母子手帳国際会議報告
Author(s)	小松, 法子; 中村, 安秀
Citation	目で見るWHO. 2024, 90, p. 6-9
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/99618
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

第14回母子手帳国際会議報告



創価大学看護学部

小松 法子 (こまつ のりこ)

看護師として病院で勤務を経験した後、JICA海外協力隊としてタンザニア連合共和国に派遣。帰国後、大阪大学大学院人間科学研究科修士課程を経て、2015年より現職。



日本WHO協会理事長

中村 安秀 (なかむら やすひで)

小児科医。インドネシアで母子手帳の開発普及に取り組む。1998年に母子手帳国際会議を開催。2024年、母子手帳の国際的普及に関して大同生命地域研究特別賞を受賞。

2024年5月9-10日にフィリピン共和国の首都マニラで第14回母子手帳国際会議が”Safe Beginning (人生の安全な始まり)”をテーマに開催されました。今回は、初めてフィリピンの地方自治体であるカラバルソン (CaLaBaRZon) 地域における第1回地域母子保健会議との共同開催でした。会議は、国際母子手帳委員会、フィリピン大学マニラ校、カラバルソン保健省地域事務所が主催しま

した。マニラ湾が一望できる LIME HOTEL AND RESORT MANILA (写真1) で会議が開催され、同時にフィリピン大学の SNS (Facebook、youtube) や ZOOM を使ってオンラインで配信されました。2日間のイベントには、海外20カ国からの参加があり、現地での参加者が208名、オンラインで参加登録した人が200名以上おり、盛大に開催されました (写真2, 3)。

カラバルソン地域は、フィリピンの首都マニラの東側から南側に位置する、Batangas、Cavite、Laguna、Quezon、Rizal の5つの州から構成されています。カラバルソン地域には多くの工業団地があるため、2020年のフィリピンの国勢調査によると、人口は1600万人を超え、フィリピンの人口の14.9%になっています。2022年のDHS (人口健康調査) の報告では、合計特殊出生率は、フィリ



写真1 「LIME HOTEL AND RESORT MANILAの会場」



写真2 「参加した国際母子手帳委員会のメンバー」



写真3 「海外から参加したメンバー」



写真4 「ナイジェリア版母子手帳 (左: 表紙、右: 裏表紙) 裏表紙には、国際母子手帳委員会のロゴも入っている」

ピン全体では 1.9 ですが、カラバルソン地域は 1.8 と国全体に比べると低く、マニラ首都圏の 1.2 の次に低くなっています。5 歳未満児死亡率は、フィリピン全体で出生 1000 人当たり 26 となっており、カラバルソン地域も同様に 26 になっています。

母子手帳国際会議の様子

1 日目は、カラバルソン保健省地域事務所の開会の辞から始まり、来賓のメッセージが続きました。日本からは野田聖子衆議院議員、亀井温子国際協力機構（JICA）人間開発部長からのメッセージをいただき、会場に来られた来賓として、空野すみれ WHO 西太平洋地域事務所（WPRO）専門官、Dr. Michael L. Tee フィリピン大学マニラ校学長などから、温かな励ましのご挨拶をいただきました。続いて、フィリピン保健省次官の Glenn Mathew 氏による基調講演「Universal Health Care and the Eight-Point Action Agenda in Ensuring Quality MCH」、中村安秀国際母子手帳委員会代表による基調講演「Safe Beginnings and the MCH Handbook」がありました。1 日目の午後は、世界の母子手帳の経験と活用について、日本を含めて 9 カ国から発表がありました。前半のタイ、インドネシア、日本、南米の発表は、国際母子手帳委員会のメンバーが現地に集合し、各国の経験と活用について発表されました。日本で生まれた母子手帳が海を渡り、各国で愛され、活用されている様子に感動しました。日本では、母子手帳は妊娠期から出産時、乳幼児期まで使われており、いくつかの自治体で 20 歳まで使える親子手帳などもできていますが、タイでは、さらに成人期や老年期まで、一人の人生に寄り添っていくライフコースアプローチができる手帳が作られていました（写真 5）。後半は、カナダ、アンゴラ、ブルンジ、ガボン、ナイジェリアからの報告がありました。後半の発表は事前に収録された動画による発表が続きましたが、ブルンジの方は 2 日間かけてフィリピンに来られ、現地で発表さ

れました。ナイジェリアの方の発表は、前回のカナダでの会議の時に画面から熱気が伝わってくるくらい熱い発表で印象的でしたが、今回の会議の前にナイジェリア版母子手帳が出来上がったこともあり、本当に嬉しい気持ちが伝わってくる発表でした（写真 4）。

2 日目は、妊産婦と子どもの死亡率に対して、カラバルソン地域のそれぞれの州における母子保健の取り組みや課題について発表がありました。フィリピンでは、国として統一された母子手帳ではなく、それぞれの地域で作られているので、カラバルソン地域でも州によって様々なツールが使われていました。最初に、カラバルソンにおける安全な母親のためのプログラムの最新情報について、発表がありました。ラグナ州サンタローザでは、健康アクセスダイアリーを作成して使わ

れている様子が発表されました。その他、安全な出産が行えるように研修が行われている様子、妊婦の栄養改善の取り組み、産後ケアなどそれぞれの州から発表されました（写真 6）。

午後は、「効果的な母子保健ケアについて」をテーマに発表がありました。カラバルソン地域の妊婦登録システムについての発表や、日本における低出生体重児のための母子手帳サブブックについての発表、オランダやケニアで母子手帳のデジタル化に向けての動向や、フィリピンの妊婦健診の改善についての発表がありました。ケニアからの報告では、新しい取り組みとして、母子手帳の記録されたページの写真を撮るとそのままデータ入力ができるシステムを活用したものでした。日本でもまだデータ化が進んでいない中、ケニアで母子手帳のデータ化に



写真5「タイの取り組み。年代別の4つの健康手帳アプリを継続することで、人生に寄り添っていくライフコースアプローチができる」

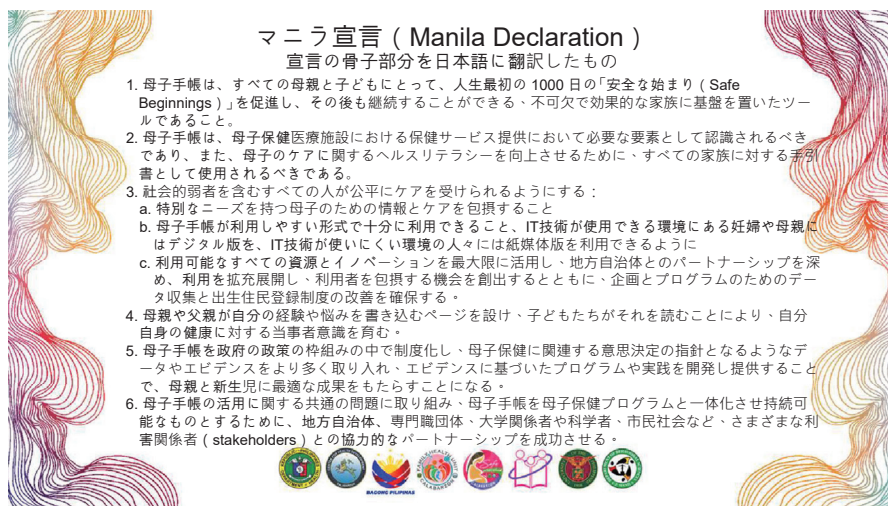


表1「マニラ宣言（日本語訳）」※マニラ宣言の節に引用あり

向けて動いている状況を知り、とてもビックリしました。また、日本の低出生体重児のためのサブブックは、今各都道府県で作成されて配布が開始されており、あと1つの県を残すのみになっています。最後の1県も2024年度中に作成されて、2025年度には配布を開始すると報告されました。それぞれの国の状況に合わせて、だれも取り残されることがないように、母子手帳が活用され、進化している事を実感しました。

マニラ宣言

2日間の母子手帳国際会議を受け、マニラ宣言が発表されました。国際母子手帳委員会メンバーで今回の会議準備で大活躍したフィリピン大学の Calvin さんと共に、大阪大学大学院人間科学研究科で学んだインドネシアの Narila さんが代表して読み上げました（表1）。

マニラ宣言は、誰も取り残されることがないように、世界における母子手帳の包摂的、公平かつ持続可能な実施、モニタリング、アップデートを目指して、母子手帳を有効に活用するために可能な限り幅広いリソースを用いていくこと。母子手帳の効果的な実践と持続可能性に向け、新しい決意と協力の強化、そして共通の目標をもって、カラバルソン地域をはじめとする世界中の母親たちと子どもたちに、人生の安全な始まりと豊かな未来を確実にすることを約束しあう宣言となりました。



写真6「カラバルソン地域の発表後、活発な質疑応答が行われました」

ヘルスセンター訪問

会議の前日には、国際母子手帳委員会と海外から参加していたメンバーで、フィリピンのプライマリーヘルスケアを提供しているバランガイヘルスセンターを訪問しました。そこでは、実際にヘルスセンターで提供されている母子保健活動について、看護師の方から説明していただいたり、母子手帳を使っている妊婦さんにお話を聞かせていただいたりしました（写真7）。実際に母子手帳が使われている場所を訪れることは、現地に行かないと経験できないことなので、とても貴重な機会になりました。

私たちが訪れたヘルスセンターでは、妊婦健診に来られた妊婦さんを登録する紙の台帳もありましたが、データ入力されてデータでも管理されていました。フィリピンのヘルスセンターの中でも、データで管理している場所はまだまだ少ないと言われていました。また、ヘルスセンターでは、妊婦健診以外に、医師の診察や薬の処方、予防接種、HIVの検査など様々な業務が行われていました。

フィリピンの母子手帳の中で、一番使われているページは予防接種の記録のページと言われていて、実用的なページが一番活用されていました。母子手帳を使っている妊婦さんは、赤ちゃんのケアや妊娠中の過ごし方のページが役に立っていると話されていました。フィリピンでも、父親はあまり母子手帳を読んで

いないと言われていて、もっと活用してもらえたらいいなと思いました。

フィリピン大学訪問とMOUの締結

ヘルスセンター訪問の後、今回の母子手帳国際会議と一緒に主催しているフィリピン大学の学長室を訪問させていただきました。フィリピン総合病院（PGH）の最上階にある学長室で、今回、国際母子手帳委員会とMOUを締結するため、Dr. Michael L. Tee 学長、Dr. Mario Philip リプロダクティブヘルスセンター所長、国際母子手帳委員会の中村安秀代表、板東あけみ事務局長、Agustin Kusumayati 理事（インドネシア大学）の5名がMOUの書類にサインをしました（写真8）。これから、フィリピン大学と国際母子手帳委員会の間で母子手帳や母子保健に関する国際共同研究が進展していくことを期待しています。学長は翌日の国際会議での挨拶で、日本の母子手帳に関する学術論文にも触れていただき、母子手帳への熱い思いを話してくださりました。

WHO 西太平洋地域事務所（WPRO）訪問

マニラ市内にある WPRO を、国際母子手帳委員会のメンバーと一緒に訪問しました。WPRO には、日本 WHO 協会がいつもお世話になっている野崎慎仁郎さんと穴見翠さんをはじめ、多くの日本



写真7「バランガイヘルスセンターで母子手帳や母子保健サービスについて説明をしていただきました」



写真8「フィリピン大学とのMOUの締結」

人の専門家が勤務されています。今回は、母子保健チームの空野すみれさん、芝田おぐささんなどと面談させていただき、WPROの概要や母子保健分野で力を入れている新生児死亡に対するケアや妊産婦ケアなど色々お話を伺いました。WPROの管轄には、日本やフィリピンだけでなく、ミクロネシア等の島しょ国も含まれており、それぞれの国の状況に合わせたケアや課題などに精力的に取り組まれている状況がよくわかりました。また、帰る前には、WPRO国際会議場の見学もさせていただき、西太平洋地域の代表が集まって会議をする場所に実際に足を踏み入れることができ、感動しました（写真9, 10）。

母子手帳国際会議の予定

今回の母子手帳国際会議は、2026年にインドネシアで行われることが発表されました。インドネシアは、全国で母子手帳が使用されており、いまや世界最大の母子手帳印刷数を誇るとともに、低出生体重児のためのリトルベビーハンドブックの開発も始まっています。2年後、インドネシアでさらに進化した母子手帳と共に、母子手帳に熱い思いを持った世界から集まる方々と再会できることを楽しみにしています。

参考文献

- CaLaBaRZon の人口

<https://www.philatlas.com/luzon/r04a.html>

- Philippines 2022 DHS Final Report

<https://dhsprogram.com/publications/publication-FR381-DHS-Final-Reports.cfm>

- 第14回母子手帳国際会議のホームページ

URL : <https://conference.mchhandbook.com/>



写真9「厳肅な雰囲気の中WPRO国際会議場」



写真10「各国の旗がたなびく夕暮れ時のWPRO」